

ヤングケアラー ―おとなを背負う子どもたち―

大阪教育大学 神村 香織

以前から、大学の授業では毎時間ごとにジャーナルという振り返りを書かせてきた。授業に関する小レポートのようなものである。しかし、2020年は少し違った。コロナ禍の先の見えない中、ただただ自宅でオンライン授業に取り組む毎日が続いていた。学生たちの行き場のない想いが充満していることを感じていた私は、ジャーナルの記載事項を変更して、何を書いてもよい、何も書かなくてもよいコーナーを作ってみた。すると、予想以上に多くの学生がそれを日記のように活用しはじめた。学生の中には、パン作りをはじめたこと、ペットの犬と一緒に昼寝をしていることなど、先生あのね帳のように、日々の暮らしを書いてくるものもいた。それはそれで読むのも楽しい作業であった。しかし、また一方で、自分にとって「自宅」が決して安全な場所ではないことを書いてくる学生もいた。「星野源の『うちで踊ろう』が流れてくると、気楽でいいなと思う」「今、私は、家で音も立てないようにして生きている」などと綴られた自由記述欄を読むと、どんな言葉をかけることができるだろうかと長い夜に考えるのだ。

さて、ある学生が、次のような内容を書いてきた。大阪で下宿をはじめ物理的に距離をとることができたにもかかわらず、故郷の母親からの依存に押しつぶされそうになっていた。詳しいことは割愛するが、その中で見えてきたのは、家族の中で「ヤングケアラー」として生きてきた学生の姿が、コロナ禍であぶりだされていることである。そこでジャーナルの返事に、ヤングケアラーという概念があなたに起きていることを理解するのに力になると思うと書いた。自分に起きていることは個人的な経験ではなく、社会の中で名付けられ、その対策が講じられようとしていること、そこに未来があることを伝えたのである。その時の学生からの返信を少し改変して紹介しよう。「ヤングケアラーという言葉は初めて聞きました。『私、あれもこれも当てはまってる』と思いました。『私は悪くない』って叫びたくなりました。わたしがやらなきゃ、この家族は崩壊してしまうのではと思うと怖くて、気がつくと家族のことを考えているんです。もうほんとに『私、えらいえらい』って、自分で自分を慰めてあげたい。」。こうした学生の事例は、残念ながらどの授業クラスにおいても多くみられる。

「ヤングケアラー」とは、おとなに代わって、家族の介護やケア、身の回りの世話を担う18歳未満の子どものことをいう。日本ではこの1-2年でようやく新聞紙上にも掲載されるようになったが、その認知度はまだまだである。そのため、

自分が「ヤングケアラー」という認識がないという子どもがほとんどである。国レベルで実態調査の必要性が求められているが、その中で 2020 年度に大規模調査をおこなった埼玉県では、25 人に 1 人が、ヤングケアラーに相当するという結果が明らかになり、衝撃を与えた。これまで存在が隠されていた子どもたちの実態が明らかになりつつある。「ヤングケアラー」という言葉に少し関心を持っていただけたらと思う。